

会津戦争前後の 遺体埋葬実態解明

飯沼 一元

第一章 はじめに

会津戦争戦死者の遺体処理に関しては諸説があり、中には重大な誤解もある。

戊辰戦争で勝利した新政府軍は、会津に対しては特異とも言える非道な処置を強制した。即ち、①埋葬地は罪人墓地に限定、②埋葬人夫は非人（士農工商に属さない「人に非ず」とされた罪人等）に限定、③墓標の設置禁止である。

古今東西、幾多の戦死者に対して埋葬自体を全面的に禁止した例は無い。理由は、放置した遺体が放つ悪

臭に困るだけでなく、伝染病発生の原因になるからである。

遺体の弔いは一般に、①埋葬、②墓又は墓標の設置、③供養（魂の弔い）を通して、後世に引き継がれる。会津に対する前記の処置は弔いを一切できないようにする前代未聞の行為、一言でいえば「魂の侮辱」である。

本稿では、第二章で会津戦争の歴史的背景と会津藩戦死者の遺体処理の実態を、文献①『辰のまぼろし』、文献②「国事受難戦没者、特に反政府軍戦死者の慰霊実態」（以降「成城大学」と略記）、文献③『会津戊辰戦死者埋葬の虚と実』（以降『虚と実』と略記）を基に解明すると共に、会津の先人達がこの難問に如何に

立ち向かったかを解説する。そして、文献③『虚と実』には重大な誤解があることを示す。

次に、会津軍戦死者の埋葬を通して前記「魂の侮辱」を強行した犯人を特定するため、第三章では戊辰戦争の会津以外の三大戦争（上野、白河口、函館）における戦死者の弔いについて、それぞれの共通点と違いおよび会津との違いについて述べる。

第四章では、関連する他の戦争として、戊辰後の萩の乱、西南戦争および戊辰前（幕末）の四境戦争を取り上げ、戦死者の弔いの違いとその実態を説明する。

最後の第五章で、会津藩に強要された異常な埋葬処理の要因とその犯人の割出しに迫る。

第二章 会津戦争戦死者の弔い

一、会津戦争の歴史的背景

戊辰戦争は慶応四年（一八六八）一月に京都を舞台に開戦し、明治二年（一八六九）五月に函館で終戦した我が国最大級の内戦である。新政府軍が徳川幕府軍に勝利し、二五〇年続いた江戸幕府に代わって新政府による新しい政治体制が誕生した。

これが明治維新の始まりであるが、戊辰戦争が勃発

した原因の一端は、幕末に京都を舞台とした会津藩と長州過激派の対立であり、その実態を理解しない限り埋葬問題の本質を見誤る恐れがある。

黒船来航（嘉永六年（一八五三）以来、開国を巡って幕府と朝廷とで意見の対立が激しくなった。孝明天皇は攘夷（外国排斥）を主張し、幕府開国派と薩長土肥等の雄藩の思惑が揺れ動き、京都を舞台に「天誅」と称する殺人事件が多発するようになった。幕府はこれを鎮圧するために京都守護職を設置した。

この時、会津は越前藩松平春嶽の奸計により、京都守護職を無理やり拝命させられた（文久二年（一八六二））のである。元来天皇に崇敬の念をもつ松平容保は、多大な犠牲を払って他のどの藩にも増して孝明天皇に忠誠を尽くし、天皇から厚い信頼を得られたことは天皇直筆の手紙「御宸翰」が証明している（文献④、⑤、⑥）。

一方、攘夷派の孝明天皇を巡り、長州は帝を巧妙に利用する作戦に出たため、会津との対立は先鋭化し、池田屋事件で長州藩幹部が新選組によって殺害された。かくして関ヶ原の戦いで敗れ、領地を三分の一に削減された長州の徳川への恨みに火が付いた。久坂玄瑞ら超過激派は帝の拉致を狙って御所を襲撃した（禁

門の変」が、薩摩藩の援軍を得た会津が勝利し長州は敗退した。

しかし、長州藩はその後、急進派の高杉晋作が騎兵隊を組織して巻き返しに出た。騎兵隊とは農民に武器・弾薬を与え西洋式軍隊として訓練した新しい軍隊である。その後、坂本竜馬の仲介による薩長同盟の成立、孝明天皇の崩御（毒殺説あり）、徳川慶喜の大政奉還等紆余曲折を経て戊辰戦争に至る。中でも「錦旗の捏造」を指示した岩倉具視の策略と天才軍事家大村益次郎の登場は新政府軍の勝利を決定的にしたのである。

天皇に忠誠を誓う会津にとって、「錦旗の捏造」は考えるだけでも畏れ多い「禁じ手」であり、「ならぬことはならぬ」の「什の掟」第四条「卑怯なことをしてはなりませぬ」で子供も皆知っていることなのである（以上、文献⑦『白虎隊士飯沼貞吉の回生』参照）。

明治維新はその後、急激な政治変革を巡って「土族の乱」が各地で発生し、明治一〇年（一八七七）の「西南の役」で薩摩の西郷隆盛が玉碎し、その翌年大久保利通（西郷隆盛、木戸孝允ら維新の三傑の最後の一人）が暗殺されて維新の前半が終了したと言える。

その後、新政府の中枢は伊藤博文、山縣有朋、井上馨ら明治の元勳と呼ばれる長州閥が実権を握り、富国

で、明治二年（一八六九）一月以降に護国寺、高田藩、芝増上寺に謹慎処分となった（文献⑨他）。

西軍は奥羽鎮撫総督府が統括する三〇以上の諸藩隊（薩摩、長州、土佐、佐賀、大垣、小倉、岡山、米沢他）で構成され、推定人数は四〇〇〇～七万五〇〇〇と幅が広い。筆者の見立てでは七万五〇〇〇は東征隊合計で、会津戦争に参戦したのは約五〇〇〇とみる。主力は伊地知正治率いる薩摩で、山田顕義率いる長州、板垣退助の土佐が続く。

西軍の戦死者数は後述するように西軍墓地に一七四柱が埋葬されているから、発見できなかった者を含めて約二〇〇であろう。負傷者を含めて参戦兵の九〇％以上が無事帰還したことになる。対する会津は参戦者の約四〇％が死亡したのである。

三 会津戦争終了後の戦後処理の体制

戊辰戦争における政府の最高決定権は太政官トップの三条実美さねみにあり、軍務官トップは有栖川宮熾仁親王たかひと、刑部省トップは江藤新平である。会津戦争が終了した明治元年（一八六八）九月二二日以降、西軍は戦後処理を速やかに実行するために、会津に会津鎮撫総督府を設置した。その役割は、治安維持（軍務局担当）、

強兵による日清・日露戦争を経て、満州進出から太平洋戦争へと突き進んでいった。一方、会津は維新の後半には戊辰戦争での冤罪を晴らす、即ち「会津は朝敵にあらず」を立証することに注力する。

以上、前置きが長くなったが、会津では「新政府軍」を「官軍」とは呼ばず「西軍」とし、幕府軍を「東軍」とするので本稿もこれに倣う。「官軍」の敵は「賊軍」であり、会津は新政府軍から「朝敵・国賊」という濡れ衣を着せられたことを最も忌み嫌うからである。

二 会津戦争の参戦者・戦死者・生存者数

会津軍の参戦者数は、正規軍（白虎隊、朱雀隊、青龍隊、玄武隊）が約三五〇〇人、奇勝隊（正奇隊、修験隊、力士隊など、臨時に編成した半士兵）約三〇〇〇人、農民・町人兵（新鍊隊、敢死隊等）二〇〇〇人、佐幕派応援隊（伝習隊、衝鋒隊、新選組、凌霜隊、水戸藩諸生党など）約五〇〇人で合計約九〇〇〇人とされる（文献⑧）。

一方、戦死者数は会津隊士約三〇〇〇人の他、農民等が戦乱に巻き込まれ多数の死者が出たとされる。また、会津藩士の生存者は、城内組約三二〇〇人、城外組約一七〇〇人、傷病兵約九〇〇人合計約六〇〇〇人

行政管理、および処分手続（刑部省担当で後の萱野権兵衛の処刑）である。

会津戦争戦死者の埋葬に関する尋問、処分等は新政府在会津軍務局の「白洲」で実施された。白洲とは江戸時代の大岡裁判等で登場する裁判所のことである。トップは岡山藩出身の三宮耕庵さんぐうこうあんで、その配下に越前藩出身の久保村文四郎がいた。なお、後述するように埋葬は第一次（自軍の戦死者）、第二次（自刃白虎隊士）、第三次（約三千人の会津藩戦死者）の三段階で行われた。

これに対して、会津側は民生局の担当で、町野主水まちの もんどと伴百悦ばんひやくえつが中心となって対応した。なお、主水の当時の名前は源之助であるが、本稿では改名後の主水を使う。

なお、文献③『虚と実』にはP15に「民生局の指示で遺骸を埋葬した」と記載されているが、これは「軍務局の指示」の誤りである。また、第一次から第三次までの埋葬は区別なく同等に行われ、会津軍戦死者埋葬に対して前述した非道な埋葬三条件を強制した事実は無いとし、従来の歴史認識を否定した。以下、これが重大な誤解であることを示す。

四 会津戦争死者の埋葬の実態

いよいよ、本稿の核心である埋葬の実態について述べるが、時期的に早い順に第一次（西軍死者の埋葬）、第二次（白虎隊士の埋葬）、第三次（会津軍死者の長命寺・阿弥陀寺への埋葬）に分けて説明する。

【第一次 西軍死者の埋葬（一〇月～十一月）】

本件に関しては文献③『虚と実』に若干記載されているが、後述する第二次と第三次と下記の点で著しく違っている。①白洲での尋問が無い、②遺体の収集を会津に金を払って命令・実施させ、結果を『戦死屍取仕末金銭入用帳』（以下『入用帳』と略記）として書面で提出させた。これは東軍と西軍が混在している多数の遺体の中から自軍の遺体だけを選別し、丁寧に埋葬するためである。

命令は明治元年一〇月二日（終戦の一〇日後）で、翌三日から開始し提出日は一三日後の一六日と迅速である。記録の前半は支払い費用の日別記録（「金銭出納帳」）で、後半は遺体発見日、場所、人数、服装、状態が記録された「遺体調査書」で構成され、末尾に会津の担当者四人の名前がある。文献③のP158には『入用帳』のサイズと枚数の記載があるが数字に食い違い

があるので若松市観光課に調べてもらったところ、横三四cm、縦一二cm、総枚数三四枚である。

なお、同日付けの民生局発行の公用簿籍（指示書）には軍務局からの命令を受け「死体の取り片付けは、穢多^{えだ}肝煎左与之助を呼び出し約二百人の穢多を集めて実施させた」と記載されている（文献②⑩）。

当時「穢多」は皮革^{ひかく}業等に従事したのに対し、「非人」は犯罪者・乞食等で穢多の支配下に置かれるなど最低の扱いを受けていた。後述するように、在会津軍務局は東軍の死体処理人夫を「非人」に固執したので、会津と西軍とでは遺体取り扱いに決定的な違いがある。

文献③『虚と実』では『入用帳』に記載された遺体の合計人数は五二二人となっている。

一方、西軍墓地には現在一七四柱が埋葬されているので、計算上は三四八人（全体の2/3）が西軍以外即ち会津藩関係の死者となる。

第一次の遺体処理は、野晒しにされた多数の遺体の中から各藩の戦死者を選別し、これを埋葬し、共に戦った戦友を弔うために実施されたものと言える。戦友を野晒しのまま放置して戦地を離れるのは、兵士としてのマナー違反である。数千人の生存西軍兵士の大部分は戦争終結後、更に他県に転戦するのではなく帰藩を

望んだであろう。故郷を出て参戦してから一〇ヵ月、

生き残った西軍兵士は一刻も早く留守家族の元への帰宅を切望するのが人情である。その為には、自藩戦死者の埋葬を迅速に実行する必要があった。筆者はその具体的な作業手順を以下のように推察する。

①白洲の担当者が『入用帳』の「遺体調査書」に記載された服装と状態を手掛かりに西軍死者を選別し、枚数を削減した「遺体調査書S」を作成する。金銭出納帳を四枚とすると「遺体調査書S」は一〇枚（^{マナス}34ー4）／3となる。

②参戦した西軍諸藩の中で戦死者を出した藩（該当藩は一〇藩）の担当者を白洲に集合させる。

③「遺体調査書S」を回覧し、各藩の担当者に場所・服装・状態から自藩戦死者メモを作成させる。

④各藩担当者は自藩戦死者メモを自藩に持ち帰り、戦死場所と照合することで戦死者名を特定する。なお、各藩は自軍の服装と戦闘場所を知っているなのでこの作業は簡単である。

⑤各藩は収集された約五〇〇の死体から主に服装を手掛かりに自藩戦死者を選別し遺体にラベルを付ける。

⑥これを会津の人足を使って西軍墓地に運ばせ、柵で囲った自藩の仮置き場に丁寧に並べさせ、むしろを

被せて本格埋葬の下準備（仮埋葬）を完了した。

また、白洲は大町の融通寺近くにあったので、西軍はこの脇に西軍墓地を設けた。

なお、当時の会津の埋葬は全て土葬であり、火葬が全国に義務付けられるのは昭和になってからである（墓理法昭和二三年）。

西軍戦死者の弔い

西軍墓地の本格埋葬は以下のように行われたと考えられる（文献②「成城大学」）。

明治元年一〇月に大垣藩（岐阜）が「大垣戦士二〇人の墓」を建立、続いて土佐藩（高知）が供養塔四基（同年秋四九柱）、薩摩藩（鹿児島）が「仙城凱旋燈籠碑」（同年十一月三三柱）を建て、さらに二月には肥前藩（佐賀）が自藩の墓地を築き、それに石の玉垣をめぐらせた。

また、西軍墓地の霊域門の燈籠の刻文には明治二年（一八六九）四月に、三宮耕庵^{さんくうこうあん}名で西軍戦没者を葬った経緯が漢文で記されており、法要が行われた（文献⑩）。なお、長州藩（山口）が「長藩戦死一五人の墓」を建立したのは翌明治三年（一八七〇）四月である。

これで戊辰の雄藩・薩長土肥の墓碑が出揃うのであるが、長州藩が遅れた理由は分かっていない。また文



図1 西軍墓地

献③によれば、他に岡山、越前、館林、備州があり、長州は二四柱となつてゐる。

西軍墓地の「供養」は明治三年秋に若松県知事の主催で「招魂祭」

が営まれ、明治九年（一八七六）明治天皇東北巡幸の折に勅使が派遣され墓前祭が行われた（文献②「成城大学」）。

その後はしばらく供養が途絶えたようであるが、昭和三二年（一九五七）に戊辰九〇年に合わせて荒廃していた墓地を大規模改修し、盛大な法要が行われた。発起人は山口県立図書館長から会津図書館長に転任した大村武一氏である。

以上の説明で明らかのように、第一次の遺体処理は会津藩死亡者を弔うことを目的としたものではない。ところが、『虚と実』の著者は二次以降の遺体処理も一次と同様に実施されたと断定した。

なお、第一次で収集された会津藩戦死者がその後どのように埋葬されたかについては、第三次埋葬を参考にしたい。

【第二次 白虎隊士の埋葬（一〇月～翌年一月）】

本件については文献①『辰のまぼろし』に詳述されている。

以下に白洲での尋問プロセスと町野主水らの格闘プロセスを述べるが、その前に主役となる彼の人となりをもとめておく。

町野主水は天保一〇年（一八三九）生まれ。元治元年（一八六四）七月の禁門の変で飯河小膳（飯沼貞吉の妹比呂子の夫の父）とともに二番槍の功名を挙げる。慶応四年（一八六八）八月、朱雀士中四番隊の隊長に就任し、北越戦線を転戦後熊倉の戦いで戦功をあげたが、戦況不利を察した主水は家族にいざという時に自刃を覚悟させ水盃を交わした。八月二三日の早鐘を合図にした入城には西郷頼母一家と同様に予め応じない

ことにしたのである。一家は勝方寺方面に身を隠したが、九月七日に母・妻・姉・長女（七歳）・長男（三歳）の五人と南摩家三人の八人が勝方寺の裏山で自害した。なお、姉は猛将佐川官兵衛の妻。主水は開城後西軍軍務局の命令で「若松取締」に就任し、埋葬や城外残留会津兵の謹慎斡旋に邁進した。後、会津藩再興に伴う斗南移封問題に関わり、食料（米）の自給を第一として、福島・越後の二分散案を強く主張した。

白洲での尋問手順は、①「出切手」の有無、②埋葬許可条件の決定、③埋葬実施細目（時期、担当、費用負担等）の決定である。ここで、「出切手」とは被埋葬者の氏名、所属隊等を記載したリストのことで遺体引き渡しの重要書類である。

町野主水の挑戦

事件の発端は飯盛山の麓に住んでいた肝煎（庄屋）吉田伊惣次が、飯盛山方面で鳥の群れが騒ぐのを不審に思つて現地に至り、自刃した白虎隊士の遺体を発見、その無残な姿を見て放置するに堪えかねず近くに葬ったことに始まる。実は発見者は伊惣次ではなく、妻左喜で自分の子供と同年代の若者の死に胸が詰まったとされる（文献⑩）。なお、時期は一〇月頃と考えられる。

文献①『辰のまぼろし』によれば、明治二年一月三日主水は何とかして、牢に捕縛されている吉田伊惣治を助け出そうとして、原田対馬（元会津藩家老で会津戦後処理のトップ）に相談。その後、牢で伊惣治に面会し当時の経緯を聴くと、伊惣治が白洲に呼び出され尋問を受け、今後屍に手を下せば「死罪に処す」と脅迫されたことを知った。その後、八方手を尽くして対策を練ると正月七日に白洲で面会が叶うが、下役に「出切手」を見せよと言われる。

ところが、これが西軍に発覚し伊惣次らが逮捕される。これを知った主水が白洲に懇願し、伊惣次らを牢から出し、白虎隊士の埋葬許可を引き出す為に粉骨碎身の格闘劇を繰広げる。約二ヶ月に及ぶ嘆願が功を成し、三宮耕庵から埋葬の「黙認」を勝ち取るのである。

主水は出切手を用意できなかった事情を説明し、代わりに絵師一瀬喜市に描かせた「白虎隊自刃の図」を持ち込み、白虎隊の生立ちや使命および自刃の詳細を説明した。

以下にそのプロセスを紹介する。

約二時間後、白洲の奥でこれを聞いていた三宮が、出切手が無い事情はよく分かったとして、主水を応接

室に案内した。主水の必死の訴えにより飯盛山で自刃した白虎隊士は特別扱いとして「不問」、つまり「黙認」されたのである。文献③P 95には「白虎隊士の遺骸は正月一〇日頃に妙国寺に仮埋葬された」と記載されている。

三宮は飯盛山で自刃した白虎隊士は、西軍と戦って戦死した「戦犯」では無いので「不問」としたことを西軍関係者に対する言い訳に使ったのだろう。

自刃白虎隊士の弔い

自刃した白虎隊士の埋葬が条件付きで許可された後、その弔い行事が現在のように毎年春と秋に会津弔霊義会の主催で飯盛山にて行われるようになるまでには長い道のりがある。

詳細は文献⑥に記載してあるが以下に要点を記す。会津藩士は戦後、謹慎となり、謹慎が明けると斗南移封となったので、戦後四年間の会津若松は武士が不在となり、代わりに町人が払い下げとなった土地を購入し移り住んだ。明治四年（一八七二）の廃藩置県を機に斗南の扱いは「勝手次第」となり、旧会津藩士が会津に戻り始めた。ちなみに飯沼家が斗南から帰郷したのは明治六年（一八七三）である。

ぎ、初めて法要が執り行われた。碑は合葬の質素なもので墓域も狭く、現在の一九士の墓とは雲泥の差がある。明治二年（一八八八）七月一日、会津磐梯山が大規模な噴火を起こした。裏磐梯に景勝地として名高い五色沼が形成されることになったのはこの噴火による。翌年、噴火で約五〇〇人もの死傷者を出した会津では、その復興のために、会津地方五郡大同団結集会在七日町の清水屋で開催された。この時期に会津に戻った西郷頼母は、戊辰二三回忌に向けて白虎隊建碑の趣意書を発行し、募金が開始された。

明治三年（一八九〇）、戊辰二三回忌に合葬墓は銘々碑にあらためられた。銘々碑は一九あり、右からイロハ順に並んでいる。慰霊祭は神式で行なわれ、式典の後に白虎隊剣舞が奉納される。なお、剣舞にも先人の長い取り組みがあるが文献⑥に譲る。

【第三次 会津軍死者の長命寺・阿弥陀寺への埋葬

（一〇月〜翌年二月）

いよいよ約三千人の埋葬の実態に迫る。第一次を前座、第二次を露払いとすれば第三次は本番である。ここに登場するエースは町野主水に加えて、伴百悦と三宮耕庵であるから、二人の人となりを紹介しておく。

明治七年に戦友仲間の信友会の人たちにより、妙国寺の遺骸を飯盛山に移し墓標が建てられた。飯盛山は別の名を弁天山と呼ばれ、芦名の時代から歴代領主の崇敬を受け、人々の参詣遊山の地であり、白虎隊士の墓所には参拝が絶えなかった。

明治一七年（一八八四）には一七回忌を期して墓石が建立され、松平容保公のご臨席を仰

伴百悦は文政一〇年（一八二七）会津藩上級藩士伴佐太郎（五百石）の長男として生まれる。伴家は代々藩の鷹番頭として、藩主の鷹狩りにおける側近として仕え、鷹の管理、調教などを統括する重要な役職を務めた。会津戦争では朱雀隊寄合二番隊中隊頭を務め、長岡城陥落後会津に戻り、籠城戦で活躍した。開城後、民政局で主水と共に会津藩戦死者の埋葬問題に最後まで取り組み、西軍軍務局久保村文四郎（越前藩）の執拗な嫌がらせに天誅を下すべく、明治二年（一八六九）七月に越前に帰藩する途中の束松峠（会津坂下町）で斬殺、西軍の捕吏が大挙して伴を逮捕しに来たところ

で自刃して果てたという。

三宮耕庵については詳細は不明だが、以下の二件が彼の人物像を知る上で参考になる。

①大村益次郎と深い交流があった。大村益次郎（長州藩士・靖国神社に巨大な銅像がある）は幕末に騎兵隊を創設した高杉晋作に西洋式兵法を指導し、第二次長州征伐の天王山となった四境戦争で幕府軍を壊滅させ、倒幕の立役者となった天才軍事家である。戦後は、兵部省トップとして徴兵制に基づく軍制改革を推進したが、士族層の反感を呼び明治二年九月四日京都で暴漢に襲われ、同十一月五日に死去した。



図2 白虎隊十九士の墓（右）と白虎隊剣舞（左）（現代の様子）

この悲劇に接し、見舞状四五通が届いたが、内三宮
耕庵が九月二四日付けで「大村大先生公」宛に出し
た記録が残っている。大村については檜崎頼三が『陣
中日記』の中で、明治の元勲山縣有朋などは呼び捨
てにする一方で、唯一「先生」とした人物である。

②「軍曹名籍録」（国立公文書館 アジア歴史資料セ
ンター）に慶応四年頃の軍曹氏名リスト二九名が記
載されており、中に「三宮耕庵（兵部）東京兵部権
少丞兼東京府少参事」の記載がある。

第三次については、文献①の『辰のまぼろし』の「戦
死者総員埋葬の事」に詳しい。

白虎隊の埋葬については、「特別に黙認」され、長
命寺に仮埋葬することができた。

しかし、今回はそうはいかない。①埋葬地は罪人墓
地に限定、②埋葬作業者は非人に限定、③墓標の設置
禁止の禁止三条件をいかにして解決するか、知恵と行
動力と決断力が試される。頼みの綱は白虎隊で理解を
示してくれた三宮耕庵である。

文献①には紆余曲折の悪戦苦闘劇が細かく記載され
ているが、最終的に三宮から埋葬の「黙諾」を引出し
た決め手は伴百悦の身を徹した埋葬への取り組みで
あった。

そこで、穢多町（会津若松市七日町西の外れ（旧祝
町））近くに住み非人に詳しい伴百悦に相談した。

⑤伴は非人に屍を丁寧扱わせるためには千両必要と答
えた。そこで主水は伝手を頼って金策に走り、大町の
星定右衛門から翌朝金千両を借りるのに成功した。

⑥伴は金を非人に渡せば頭目が私腹を満たすだけなの
で、自分が身分（五百石）を落として「非人」に入籍
して埋骨の先頭に立つ」と宣言し、死罪を覚悟して
即実行した。伴の埋葬方法は死体を一人ずつ丁寧に
藁で包み、墓地に置き土を被せるという亡骸に敬意
を払ったものだったという。

⑦主水は伴が死罪になるのを恐れ、一人で三宮を訪ね、
これらの経緯を包み隠さず述べ穏便な処置を懇願し
た。すると三宮はこの話に感動し黙認を約束した。
三宮は共に戦って戦死した会津武士の弔いの思いを
理解してくれたのである。そして、約二ヵ月の後、
二寺に総屍骸二〇三二体を埋葬し、殉難の墓と木標
を建て、滝沢に戻ったと文献③P102に記載されてい
る。主水の言う二ヵ月後とは第三次の取組開始が
一二月と考えられるので翌年の二月頃となる。一方、
会津戦争の開戦は明治元年八月一日、終戦は九月
二二日であるから、この間の戦死遺体は四〇六ヵ月

以下に紆余曲折の要点を記す。

①白虎隊が最初に戦った戸ノ口原戦場で屍三三三体が見
つかり、小田山の罪人塚に運ぶという情報が入り、
主水が軍務局に談判に行くが、全く相手にされな
かった。なお、この時主水ら民生局組は滝沢本陣が
謹慎場所に指定され、謹慎中の身分のままで活動が
許されていた。

②そこで主水は高津と二人で三宮の仮寓を訪ね、「是
非阿弥陀寺、長命寺の二寺に埋葬を許可していただ
きたい」旨を再三再四言葉を尽くして哀願した。そ
の理由としてこれらの二寺が「穢多町（被差別部落）」
に近いので、埋葬人夫は「非人」ではなく「穢多部
落民」を雇うように懇願し、東京の本局に問合せて
回答を得るまでは、三三人の埋葬を延期して欲しい
旨懇願した（第一次で説明したように「穢多」と「非
人」の違いは重要である）。

③当局は延期を拒否。その後、二寺への埋葬は許可す
るが非人の変更は拒否、この判断は東京本局ではな
く「軍務局の内議」とした。

④主水らは罪人墓地限定の第一関門を突破できたので
大いに喜ぶが、非人による埋葬現場を見て、そのあ
まりにも非道な扱い（屍を瓦礫同然に扱う）に激怒。

間放置されたことになる。

以上は柴五三郎が記した第三次の埋葬話であり、筆
者は全てが真実と確信する。

だが、実際にはこれで終わらなかった。久保村文四
郎の執拗な嫌がらせが始まる。まず、「墓標等を撤去
せよ」との厳命を出す。調達した千両は二七金である
から本部に訴えると脅迫する。そして前述の束松事件
に至ったのである。

尚、第一次で西軍が支払った五二二体の収用費用は
七四両で、単価は一四銭。第三次で主水が二〇三二体
に用意した収用費用は千両で、単価は四九銭であるか
ら、西軍の三・五倍である。なお、明治政府は、明治
四年（一八七一）に「新貨条例」を制定し一両を一円
とした。

ここで、柴五三郎についてその人となりを記しておく。

柴五三郎は柴家の三男で四男四郎は「東海散士」の
ペンネームで有名な作家、五男五郎は『ある明治人
の記録』で有名だが、後に義和団事件（明治三三年
（一九〇〇））で包囲された欧米人を中国軍から救出し
た功績で国際的に評価され、二年後の日英同盟締結の
影の立役者となった。三男の五三郎は京都で長州藩が
帝の拉致を狙った「禁門の変」で負傷。会津戦争では



図3 阿弥陀寺

に許可が下り、阿弥陀寺境内で改葬作業が開始された。各地の仮埋葬地から少しずつ土が集められ、阿弥陀寺に東西四間、南北一二間、高さ四尺の檀が作られたのは同年七月である。そして八宗合同大施餓鬼法要が西軍の許可を得て営まれた。これは仏教の複数の宗派が合同で行う施餓鬼法要で、餓鬼道に堕ちた衆生を供養しその霊を慰めるための仏教の儀式である。

その後、明治四年に若松城本丸にあった御三階を移して本堂とし、明治六年に「戦死墓」の石の墓標、翌年には「戊辰殉難拝礼殿」を建立した。これらは、い

柴家の女性五名（祖母・母・兄嫁・姉妹二人）は、足手纏いとなることを避けるために私邸で自刃した。なお、当時の会津藩戦死者埋葬に関しては、文献①『辰のまぼろし』以外にも記録文献（文献⑬⑭⑮）があるが結論は同じである。

ここでは、河原勝治の論文（文献⑬）の一部を以下に記す。

「明治元年十月五日越後街道より十里柳に向う処に湯川に平行して北方に流れる幅二間位の河あり、無数の死体水膨れとなり大根の腐れた様な色を為し丸裸にして流れあり、褌も足袋も皆穢多に剥ぎ取られ其残酷なるを見兼ね十月中旬長命寺の和尚に境内に埋めさせた。」

（戊辰會津戦争回想談其二より）
この記事からは放置された死体が如何にひどい状態であったかが伝わってくる。

また、大窪山に仮埋葬された家族の首を掘り出した経緯が記されている。

「明治二年二月大窪山に登り代々墓の末端に小高く土を盛り石を置きたるが、これ祖母と妹の首ならんと掘り起して其二つの首を風呂敷に包みしが、肉腐敗し臭気甚だしく顔目は鰯の古くなりたる如く赤色

を帯び何とも譬様なき姿にて母は声高く泣きたり。」

（戊辰會津戦争回想談其二より）
会津大窪山は寛永二〇年（一六四三）に保科正之によって創始された会津藩士用の共同墓地で、約四〇〇〇基が眠る国有地保存地区である。善龍寺の裏山一帯に広がっており、西郷家二人の墓や飯沼家の墓碑二二基（妻子を含む）もここにある。また、「奈与竹の碑」には会津戦争で殉死した女性二三人の氏名が刻印されている。河原文に記載されている女性これらの殉死者かどうかは不明であるが、会津戦争では男子だけではなく多数の女性犠牲者が出たことは事実である。なお、河原家は明治元年（一八六八）八月二三日に女性と勝治を除く一族全員が敵陣突入して全滅した。理由は勝治の父河原善左衛門が反戦を主張したのに対して、周囲の者から臆病者の誹りを受けた。そこで、敵陣突入により、「われら一族断じて臆病者に非ず」を実証するためであった。善左衛門はこの時勝治を騙して一人だけ戦場から遠ざけ、血筋を繋ぐ為に残したのである。

阿弥陀寺における会津藩戦死者の供養

明治二年（一八六九）二月二四日西軍参謀から正式

れも会津の篤志家が寄贈したものである（文献②「成城大学」）。

現在では、明治三年（一九〇〇）に設立された会津弔霊義会が毎年春と秋に飯盛山白虎隊の慰霊と併せて供養を行っている。

以上で、会津軍戦死者の遺体埋葬には前代未聞の過酷な条件が課せられ、結果として遺体は埋葬されるまで四〜六ヵ月間放置されたことが再確認された。本稿ではその犯人を割り出すことを目的として、次章以降の会津戦争前後の主要な内戦について同様な扱いがあったのかどうかを検証する。

第三章 上野・白河・函館 戦死者の弔い

戊辰戦争は京都の鳥羽伏見の戦いが発端となり、新政府軍が徳川幕府軍を壊滅させる、所謂「倒幕」を目的とした戦争である。そこで本章では、前者を「官軍」、後者を「幕軍」と記して話を進めよう。

官軍が北上する過程で、大きな戦場となったのは、上野、白河、会津、函館であるが、以下、会津を除く三大戦争について、戦死者の埋葬とその弔いについて、

順に解説する。なお、官軍が残した戦争記録には「幕軍」を会賊、仙賊など「賊」としている。

一 上野戦争

慶応四年（一八六八）四月、官軍（西郷隆盛）は江戸城無血開城に成功したが、これに抵抗したのが彰義隊である。上野戦争は、同年五月一日に、江戸の上野寛永寺周辺で起こった戦いで官軍は大村益次郎の指揮のもと、土佐藩が調達したアームストロング砲が威力を発揮し、彰義隊を壊滅させた。なお、この戦争が次項の白河口の後になったのは、官軍が首都での大規模戦争を避けるため、彰義隊を説得・解散させる交渉に手間取ったためとされる。

彰義隊戦死者の埋葬

戦闘後、上野には二〇〇人を超える彰義隊士の遺骸が残った。芝増上寺や縁故者等が引き取りを申し出たが、官はこれを許さなかったという。南千住の円通寺の二十三世仏磨和尚と、寛永寺の御用商人であった三河屋幸三郎がこれを見兼ね、戦死者を上野で火葬したうえ、官許を得て遺骨を円通寺に埋葬した。円通寺には近親者などが墓碑を相次ぎ建立、上野では明治二年

（一八六九）、寛永寺子院の寒松院と護国院の住職が密かに「彰義隊戦死之墓」と刻んだ墓碑を地中に埋めたが、表立って彰義隊を供養することは憚られる状況が続いた。

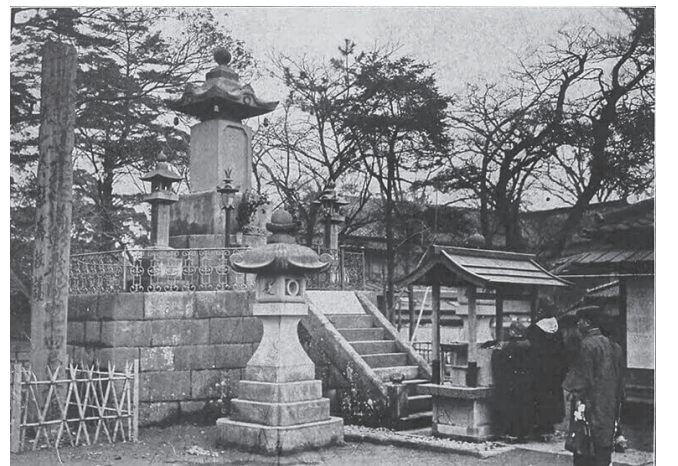


図4 上野彰義隊の墓

彰義隊戦死者の供養

明治七年（一八七四）、小川興郷ら元彰義隊士三人の願が許可され、翌明治八年に上野で彰義隊の墓が建立された。立派な唐銅製だった初代の墓は借金のかたとして持ち去れてしまい、明治一四年（一八八一）に再建許可を得て、西郷隆盛像裏手に現在の「戦死之墓」を据えた。揮毫は旧幕臣山岡鉄舟。興郷は墓守となり、その死後は遺族が茶店を営みながら墓を守った。その

後、平成一五年（二〇〇三）墓所は東京都に移管された。

彰義隊を「賊軍」とみなす人々からの風当たりによる資金難、墓地の所有権を巡るトラブルなどはあったものの、戊辰戦争における立場を超えて彰義隊士を慰霊しようという環境は次第に好転し、現在に至っている。

二 白河口（現福島県白河市）の戦い

戦闘状況

慶応四年（一八六八）四月～七月にかけて続いた白河口の戦いでは、官軍の主な参戦藩は伊地知正治率いる薩摩藩を筆頭に長州、土佐、大垣等で人数は約一五〇〇とされる。

一方幕軍（奥羽越列藩同盟軍）の参戦藩は西郷頼母率いる会津を筆頭に、仙台、棚倉、二本松、越後高田、福島等で、人数は約三〇〇〇とされる。

この戦いでは四月中旬に長州の世良修三の暴挙に耐えかねた仙台藩が彼を暗殺。その後五月一日の白河城を巡る戦いが天王山で、幕軍の死者は合計約七〇〇と一日の死者数としては歴史的数字になった。この時、長州藩第一大隊二番中隊司令の檜崎頼三が大活躍した（文献⑦及び⑬）。五月中旬以降の戦闘が長期化した理由は、戦域が白河を中心として棚倉、福島等と広く、

ゲリラ戦になったことが原因と思われる（西洋式戦法は敵の居場所が不明なゲリラ戦に向かない）。

戦死者数

戦死者について見ると、官軍の戦死者が一四〇に對して、幕軍の戦死者は七五〇と圧倒的な差がある。官軍の藩別死者は薩摩四九、長州三五、大垣・土佐一八、他一九であるが、幕軍では会津藩は副総督横山主税など戦死者約四〇〇、仙台藩は参謀坂本大炊他約二〇〇、棚倉約五〇、二本松約二〇の戦死者を出している。

そして白河を突破した官軍が次に向かったのが会津で、戦闘開始は同年八月中旬。

戦死者の埋葬

この戦の戦死者は当初、稻荷山古戦場跡や白河市内にある慰霊碑に埋葬され、前者では「両軍の戦死者を弔う」碑が複数建てられている。また、後者では両軍の碑が三〇ほど残されている。これらの埋葬は白河に住む住民の手で「両軍の戦死者を分け隔てることなく」実施された。

立・独立を宣言した事件に対する新政府軍の反撃戦である。以下、新政府軍を官軍、榎本らを幕軍としてこの戦争の概要を記す。幕軍が独立宣言したのは、明治元年（一八六八）年一〇月、官軍が江差に上陸したのが明治二年四月九日、五稜郭への攻撃を開始したのは同年の五月一日、幕軍が降伏し戦争が終結したのは一週間後の同五月一八日である。

函館戦争の参戦者および戦死者

函館戦争に参戦した官軍の総兵力は約九五〇〇、幕軍は約三五〇〇、戦死者は官軍約三〇〇、幕軍約一〇〇〇とされる。

函館戦争戦死者の埋葬

戦後、官軍は「賊軍」に関わらないよう命令していたため、函館の住民は後難を恐れて戦死者はそのまま放置していた。しかし遺体が函館市内の路傍に放置された惨状に堪えられずに、侠客の柳川熊吉と大工棟梁の大岡助右衛門は実行寺住職の日隆らの協力を得て、市中に放置されていた遺体を回収し実行寺・称名寺・浄玄寺に仮埋葬した。その後、明治四年（一八七二）に、函館山の麓に土地を購入し、仮埋葬していた遺体を改

戦死者の供養

平成二七年（二〇一五）八月に戊辰一五〇年を期して、白河市が中心となつて稲荷山に「戊辰戦争白河口の戦い戦死者近代の碑」と「戊辰之碑」という立派な合

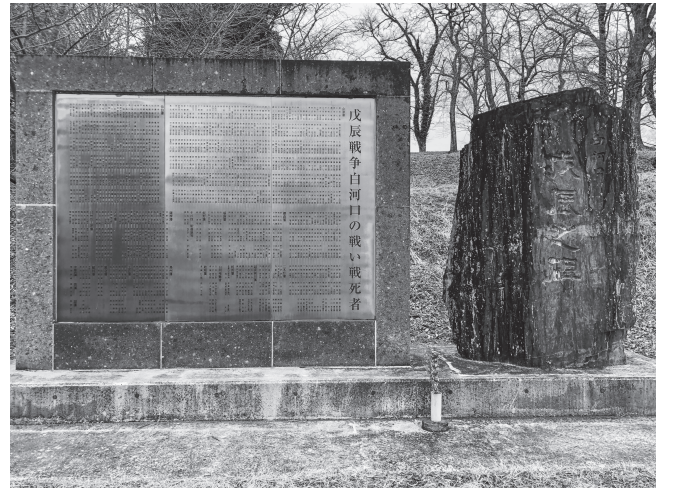


図5 白河口戦没者慰霊碑

同碑が建立され、盛大な慰霊祭が行われた。なお、この碑の表面には官軍・幕軍とも出身藩別に戦死者名と「戊辰戦争白河口の戦い記念碑建設委員会」が刻印されている。

白河踊り

ここで、他に類を見ない特別なことが起こった。それは、この戦いが七月まで続いたことで、地元の盆踊

りとの繋がりができたことである。詳細は文献⑬、⑭に譲るが要点は以下のようになる。

旧盆になると地元で盆踊りが始まった。太鼓の音が響いてくるのを聞いて藩士達は見物に行った。そのうちに、「一緒に踊っぺー」と誘われ、踊るようになった。戦争が終わって出身地に戻った藩士たちはこの「白河踊り」をお土産代わりに地元を広めたという。

「白河踊り」は現在萩市佐々並など山口県内約九〇地区、岐阜県内五地区で踊られている。白河では長州の榑崎頼三隊と岐阜の大垣隊が密に連携して戦ったことが、頼三の『陣中日記』に書かれている。その頼三は白虎隊士飯沼貞吉を萩に連行し、明治元年一二月二日に萩佐々並の実家に戻り、その後貞吉を美祢の榑崎屋敷で養育した（文献⑯）。

なお、これを切っ掛けに「福島白河踊り一座」が萩を訪ね、一緒に踊るといふ交流が始まった（文献⑰）。

三 函館戦争

函館戦争の状況

函館戦争は、戊辰戦争最後の戦いで、幕府海軍副総裁の榎本武揚らが幕府艦隊を率いて蝦夷地（現在の北海道）に渡り、五稜郭を占拠し「蝦夷共和国」を樹

葬した。

函館戦争戦死者の供養

【碧血碑の建立】

旧幕府軍の中心メンバーであった大鳥圭介や榎本武揚は敗戦後東京に投獄されていたが、明治五年（一八七二）一月、彼らの卓越した能力に着目した明治政府は特赦し外交担当に迎えた。明治八年（一八七五）大鳥圭介や榎本武揚らの協賛を得て碧血碑が建立された。この碑名は、中国の故事「義に殉じて流した武人の血は三年たつと碧色になる」に由来している。



図6 函館の碧血碑

【慰霊祭】

慰霊祭は毎年旧暦の五月一六日（現在の暦では六月二五日ごろ）に旧幕府軍の法要が碧血碑前で営まれている。

第四章 戊辰戦争前後の戦争戦死者の弔い

以上で新政府が政権を掌握し、倒幕に向けて戊辰戦争で官軍を北上させ、函館で幕を閉じた経緯および三大戦争における弔いに焦点を当てて史実を整理した。この中で、上野・白河については未だ新政府軍の勝利が確定していないので、「埋葬に対する新政府軍の方針が決まっていない」とも考えられる。しかし、会津戦争で新政府軍が打ち出した埋葬許可の三条件（場所が罪人墓地、人夫は非人、墓標の禁止）、即ち、「魂の侮辱」は処理が確定した函館戦争でも見られない。では何故会津に対してだけ「魂の侮辱」を強制したのか？

この理由を探るため、本章では、戊辰後に起こった「萩の乱」と「西南戦争」に加えて、幕末（戊辰前）の第二次長州征伐（四境線戦争）を取り上げて、更に

吟味する。

一 萩の乱

萩の乱は、明治九年（一八七六）に山口県の萩で起こった明治政府に対する士族反乱の一つである。

士族の乱とその要因

明治維新後、士族は特権を失い、政府の政策に対する不満が高まり、西日本各地で士族による反乱が起こった。不満の主な原因は、

- ①徴兵令の発布（二〇歳以上の男子の兵役義務づけで、士族は特権を喪失、農民は働き手の召し上げになる。）
- ②秩禄処分（秩禄とは、士族に与えられていた家禄で、彼らの生活給である。従来、家禄は戸主に対して米の石高で支給してきたが、政府はこれを金額化すると共にその権利を一括して公債で買取ることにより秩禄制度を廃止し、明治九年（一八七六）八月に金禄公債証書発行条例を公布した。狙いは財政負担を軽減し、公債資金を活用して産業を起こし、士族を定職に就かせること（士族授産）で国全体の経済改革を図ることであった。）
- ③明治維新で活躍した武士のプライド問題（幕末から

だったが、萩には局が無かったので前原らはこれを知る由が無かったのである。

萩の乱の参戦人数

諸説あるが、前原、奥平らを中心とした約二〇〇人とする説を筆者は妥当だと思う。捕縛を指揮した清水清太郎（山口県士族）は、前原一行に礼を尽くし丁重に扱ったという。

処刑とその後

首謀者である前原や奥平ら幹部八名は、萩臨時裁判所にて死刑判決を受け、即日処刑された。処刑の最終的な判断を下したのは、山口裁判所判事岩村通俊（むらみちとし）であろう。前原一誠の墓は、山口県萩市の弘法寺にある。



図7 萩にある奥平謙輔の記念碑

萩の乱の勃発と鎮圧

明治九年（一八七六）一〇月二八日、前原一誠と奥平謙輔を中心とする不平士族が、旧藩校明倫館を拠点に同志を募り、山口県庁を攻撃しようとしたが、一行が一月三日島根県神門郡宇龍（現出雲市大社町）という小漁港に入港したところを捕縛された。わずか六日で鎮圧されたことになる。

政府が簡単に鎮圧できた主な要因は電信（現在の電報）にある。政府は国際化に備える為、明治六年（一八七三）に東京―長崎間一三〇〇kmの電信開通に成功した。下関と山口には電信局があり、東京からの政府司令は瞬時に届いたので前原らの動きは丸見え

また奥平謙輔の墓は萩市の毛利家の菩提寺大照院墓地にある。おそらく遺族が埋葬したのであろう。また、首謀者以外の参戦者は死刑を免れたようである。

図7に萩にある奥平謙輔の記念碑を示す。彼と山川健次郎との繋がりは会津では有名である。なお、筆者は二人の墓地を訪ねたことがあるが、現地では訪れる人は殆どいないようである。また、萩では萩の乱の供養等はされていない。

二 西南戦争

西南戦争の勃発

西南戦争が勃発したのは萩の乱の翌年明治一〇年（一八七七）一月二十九日である。士族の不満の背景は萩の乱とほぼ同じであるが、参戦者数は政府軍約九万人、薩軍は約四万人、戦闘期間は約七ヵ月と規模では比較にならない。以下にこの戦争の要点を記す。

①新政府閣僚からの下野と征韓論の対立…明治六年（一八七三）九月に岩倉使節団が帰国すると、西郷隆盛らの留守政府との間で深刻な対立が発生した。最も深刻な対立は征韓論であった。明治新政府の成立を海外諸国に認証させようと韓国（朝鮮）に使者を派遣したが拒否されてしまったのが原因である。

いたと考える。なお、この戦争は西郷が先導したのではない。私学過激派の西郷担ぎ出しを抑え切れなかったのである。

熊本鎮台の攻防と終結

薩軍総勢約四万人のうち熊本鎮台攻撃には一万三〇〇〇人が投入され、明治一〇年（一八七七）二月二一日に初戦が始まった。鎮台を守るのは谷干城司令長官らの政府軍約三〇〇〇人。谷は援軍が到着するまで持ちこたえるため籠城作戦をとったが、援軍の前に立ちはだかったのは田原坂の薩軍であった。ここで登場するのが熊本鎮台応援の為入城に成功した会津の山川浩と丹羽五郎率いる約一〇〇〇人の抜刀隊である。細部の説明は本論の趣旨を逸脱するので、この時彼が詠んだ歌を紹介して次に進むことにする。

薩摩人 みよや東の丈夫が

提げ佩く太刀の 利きか鈍きか

屠竜子（山川浩の雅号）

熊本局の電線は薩軍の手で破壊され、二ヶ月間不通となったが突貫工事で四月三〇日に復旧し、その後九州の主要都市に次々と電信局を設置した。こうなると、薩軍は袋の鼠である。九州のどこに行っても察知され

②士族軍隊の再教育の推進と独立国指向…西郷らが下野した鹿児島では、帰郷した士族が明治七年（一八七四）六月に私学校を設立、銃隊と砲隊軍事教育を推進すると共に、地租は納めず公債利子を一〇％にさせるなど特例措置を認めさせていた。木戸孝允に言わせれば、鹿児島は「独立国」扱いであった。また、電信は明治八年三月に熊本が開通したが、鹿児島については計画さえ立てられなかった。

③政府の挑発と私学校の過激化…政府は西郷の動きを察知し、鹿児島にあった武器弾薬を大阪に移送しようとしたが私学校がこれに激昂し、政府陸軍火薬庫を襲撃した。これが、薩摩と政府との対立を決定的なものとした。

④九州全域での長期戦争…西郷らが兵を率いて上京しようとした名目上の理由は、政府への「抗議の意見書提出」だったが、その為には熊本を通過する必要がある、その後戦局は九州全体に広がった。

⑤海外経験の有無に起因する時代認識の差…西郷や桐野ら薩軍の幹部には大久保利通のように海外視察を経験した者が無く、時代認識に大きな違いがあった。征韓論然り、意見書提出に大軍を率いての上京然りである。筆者は彼らの時計は一〇年前から止まっ

る上、薩軍各隊間で連絡が取れず全軍の指揮が麻痺した。

九月二四日、西郷隆盛が城山で自決し、戦争は終結した。それより四ヶ月前の五月二六日に木戸孝允が京都で病死しており、翌明治十一年五月一四日には大久保利通が東京麹町の紀尾井坂で暗殺された。維新の三傑と呼ばれた三人が続いてこの世を去り、内戦の時代は終わりを告げた。

西南戦争の政府軍および薩摩軍の戦死者数

政府軍約七〇〇〇人、薩摩軍約七〇〇〇人という。

西南戦争の薩摩軍戦死者の埋葬状況

戦死者埋葬については、これまで述べた他の戦争とは全く違うので以下に詳しく述べる（文献②「成城大学」）。

①西郷以下幹部四〇名の遺体は即日浄光明寺に手厚く埋葬され、墓標が建てられた。

②翌日、約一〇〇名の遺体が浄光明寺に埋葬され、墓標が建てられた。

なお、これらは岩村道俊鹿児島県令（土佐藩出身）が、総司令官山縣有朋（長州出身）の許可を得て



図8 鹿児島市の南洲墓地（右）と南洲公園（左）

③ 西南戦争で鹿児島以外での薩摩軍戦死者は激戦地、植木・川尻で約九〇〇体埋葬された。

西南戦争の戦死者の供養

① 供養の準備は三回忌の明治十二年（一八七九）から開始され、募金開始と分散遺骨の埋葬、墓域の拡張、香台や常夜燈の設置を進め、明治一六年（一八八三）に約二〇〇〇体の遺骨が浄光明寺に改装された。

② 明治三二年（一八八九）の大日本帝国憲法発布に伴う大赦令により、国事犯の賊名赦除

が実施された。これにより、西郷は賊名解除と共に正三位を追贈された。これを機に顕彰事業は全国に拡大し、西郷銅像の上野公園設置（明治三十一年（一八九八）、南洲神社五〇年祭（昭和二年（一九二七））が盛大に執行され五万人を超える参列者が集まった。

③ その後、鹿児島市は南洲公園を設置し、一〇〇年祭に際して西南の役遺族会（会員約八〇〇）が結成され、墓域が拡張され墓地には約八〇〇基の碑が建っている。

④ 南洲神社の大祭は毎年二月二日と九月二四日の年二回行われ、慰霊及び顕彰を行っている。
なお、政府軍戦死者の供養は後から政府の手で実施されているが、小規模である。

三、幕末の四境戦争

四境戦争の経緯

四境戦争は慶応二年（一八六六）六月七日の大島口の戦いに始まり、一〇月七日の小倉口の戦いで終わるまでの三ヶ月の戦争で、高杉晋作が農民中心の騎兵隊を組織し、大村益次郎がこれを西洋式軍隊に仕立て上げた我国始まって以来の画期的事件である。

幕府軍は、「芸州口（広島県）」「周防大島口（山口県）」「石州口（シ）」「小倉口（福岡県）」の四方面から長州藩を攻めたので四境戦争と呼ばれる。結果は芸州口では勝海舟の斡旋により引き分けに終わったが、他の三ヶ所では幕府は完敗、倒幕派が大躍進する切っ掛けになった。

参戦者と戦死者

参戦者は幕府軍約一五万人、長州軍は約一万人という。一方、戦死者数（負傷者を含む）は幕府軍約三〇〇〇人、長州軍約一〇〇〇人とされる。

戦死者の埋葬処理

戦死者の埋葬については一定のルールはなく、個別の事情によるようである。特に、芸州口の戦いがあった大竹市には歴史研究会の手で様々な逸話が紹介されている。例えば、彦根藩の伝令使者を誤殺したのを詫びて和木村安禅寺境内に「彦根戦士の墓」を建立したとか、宮津藩士の使者を誤殺したのを目撃した村人が依田神社に「残念さん」という碑を建て供養しているなど。

戦死者の供養

幕府軍としては戦死者の遺体を放置することは、藩の責任放棄と威信に関わる行為となるため、各藩は可能な限り戦死者の遺体を回収し自藩の慣習に従って埋葬し、供養したと考えられる。

なお、大竹市では芸州口の戦いにより町は罹災被害合計約八〇〇〇件という大きな被害を受けた。市は明治一〇〇年を記念して、青木神社境内に記念碑を建てその後、平成一六年（二〇〇四）に小瀬川河川敷内の青木公園に移設した。

一方、長州では戦死者を慰霊するため、各地で招魂祭が執り行われている。桜山神社招魂場は、高杉晋作の発議により、殉国の志士たちの霊を祀るために創建された。慶応元年（一八六五）に落成し、下関戦争、小倉戦争、戊辰戦争などで戦死した志士たちの神霊が祀られた。身分に関係なく、吉田松陰、高杉晋作、久坂玄瑞など有名な志士から名もなき志士まで平等に祀られている。

また、東行庵（山口県下関市吉田）は高杉晋作を祀る菩提寺であるが、散逸した奇兵隊戦死者の墓を遷葬して集め、定期的な供養も行われている。図9にその供養祭開催時の慰霊碑を示す。この碑には高杉晋作



図9 下関吉田の東行庵の慰霊碑

が慶応元年（一八六五）八月に亡き同志を偲んで詠んだ歌が刻印されている。

おくれても おくれても

また君たちに誓しことを あに忘れめや

（晋作）

第五章 むすび

以上の戦死者埋葬状況および供養の調査結果を元に作成した比較表を図10に示す。

この図で分かるように、戊辰戦争前後の戦争で新政府軍は幕府軍戦死者埋葬に対して一律に扱ったわけではなく、戦争の局面に応じて対応したといえよう。戦

番号	年月日 開始上、終了下	内戦の名称	戦場	埋葬許可 3条件	遺体放置 期間(月以内)	供養	戦死者数 (勝者)	戦死者数 (敗者)	敗者 軍隊名	供養碑	定例 慰霊祭
1	1866/06/07 1866/10/07	四境戦争	山口/広島	無	1	○	1000	3000	幕府軍	*桜山神社 *東行庵	○
2	1868/05/15	上野戦争	東京上野	無	1	○	0	200	彰義隊	戦死の墓	○
3	1866/07/14 1866/10/07	白河口 の戦い	福島県 白河	無	1	○	140	750	会津、 仙台他	戊辰の碑	×
4	1866/09/24 1866/10/07	会津戦争 (埋葬一次)	会津	無	1	○	200	3000	会津軍 他	西軍墓地	×
5	1868/08/23	会津戦争 (埋葬二次)	会津若松	有	4	○	0	19	白虎隊	白虎隊 19士の墓	○
6	1866/09/24 1866/10/07	会津戦争 (埋葬三次)	会津	有	6	○	200	3000	会津軍 他	阿弥陀寺	○
7	1869/05/18 1866/10/07	函館戦争	北海道 函館市	無	1	○	300	1000	榎本隊	碧血碑	○
8	1877/11/06 1866/10/07	萩の乱	山口県 萩市	無	1	×	0	8	前原らの 反乱軍	なし	×
9	1877/09/24 1866/10/07	西南の役	鹿児島県 鹿児島市	無	1	○	7000	7000	西郷の 薩摩軍	南洲墓地	○
*長州藩の碑											

図10 戊辰戦争前後の我国内戦における埋葬および供養状況比較

争では予期しないことが起こり得るのでこれは納得で

きる。しかし、会津に対してだけは、①埋葬地は罪人墓地に限定、②埋葬作業者は非人に限定、③墓標の設置禁止の禁止三条件を課した。この禁止三条件は「戦死者の魂の侮辱」であり、筆者は前例を知らない。

そして会津は、①朝敵とされた理不尽と、②この埋葬問題と、③その後の斗南移封で武士が町から追い払われ、「会津魂と文化」が散逸するという前代未聞の事態に至った。

本稿の主目的はこれら三つの不当な扱いの内、②の埋葬問題で「禁止三条件は誰が強制したのか」を解くことである。以下にその考察と結論を示す。

①東京か会津か？

文献①『辰のまぼろし』には度々「東京に問合わせるから待て」の記述があるが、東京からの回答は一切出てこない。また、新政府軍から禁止三条件を明文化して出した証拠はない。尤も、もし、新政府軍が正式にこれを出したら歴史上の汚点となり、とんでもないことになる。

また、在会津軍務局の決定については「軍務局の判断で黙認」と三宮の責任で決定したとある。従って、①の結論は東京の本部ではなく在会津軍務局と

なる。

②久保村の単独犯行説の検証

在会津軍務局となると筆頭の三宮か久保村か両者の合意かの三択問題となる。

三宮は善人で久保村は悪人だから、久保村単独犯行が有力であるが、以下にその裏付けと動機を検証する。

久保村の肩書は「民政局監察方頭取兼断獄」である（会津への夢街道WEB参照）。ここで、「断獄」とは「罪人処分の裁判権」を有することを示す。久保村は「三宮の配下」であるが、「裁判権」を有していた。そこで、その権限を履行するため、「禁止三条件」を決め強制した。理由は、会津は朝敵の筆頭である。「厳罰は当然」等であろう。

ところが、実際にこれが実行され主水の必死の嘆願が始まると、武士の心に理解のある三宮が「これはやりすぎ」と気付き「黙認」したのであろう。

なお、文献①『辰のまぼろし』には久保村名は出てこない。白洲役人を示す用語として「下役」と「吏」が使われており、「吏」は三宮を指すので、「下役」は久保村を指すと考えられる。そして、「下役」が下した命令が①出切手を見せよと②屍に手を触れた

ら死罪に処すである。三宮が下した第三次の埋葬に不満を抱いた久保村は、その後も陰湿な方法で会津イジメを継続した。

以上から、筆者は「犯人は久保村」が実証できたと考える。

伴百悦が下した「天誅」は筋が通っているのだ。

一方、会津の「長州憎しの三つの理由」の内、②の埋葬問題の責任は長州には無いことになる。つまり、長州の責任は、①の「朝敵とされた理不尽」と③の「斗南移封処分」とすべきであるが、本稿の目的外となるので此处では言及しない。

会津の戦後処置のために民生局に任命された町野主水ら会津の先人達の懸命な努力によって、二寺への埋葬が認可され、供養ができるようになった。この過程で白虎隊士飯盛山自刃が軍務局トップに深い哀悼の念を抱かせ、約三〇〇〇人の戦死者埋葬許可に繋がったと言える。白虎隊で唯一生き残った飯沼貞吉はこの事実を知っていただろうか？

貞吉は大正一三年（一九二四）に、朝敵・国賊として差別され続けてきた会津に、皇太子殿下（後の昭和天皇）が飯盛山に行啓された折に詩を詠んだ。

日の御子の 御影あおぎて 若桜

散りての後も 春を知るらん （孤舟）

日の御子は皇太子殿下、若桜は飯盛山で自刃した白虎隊の戦友たちのことである。

飯盛山に墓碑が出来なければ、この行啓は無かったであろう。なお、「日の御子」の歌碑は飯盛山の貞雄の墓の隣にある。孫として貞雄に替わって本稿を後世に残したい。

一方、新政府は「埋葬禁止令を出していない」から、会津藩士の埋葬処理に過酷な対応をしたという「従来の歴史認識は誤り」であるとの結論を出した文献③『虚と実』の著者は軽率の誹りを免れない。彼は『辰のまぼろし』の記録とこの結論との間に矛盾があることを承知の上で、本を出版し、これが全国に拡散した。著者の責任は重大である。なお、現在『虚と実』は絶版で入手困難であるが、萩図書館では閲覧可能である。

この本の出版後、会津を代表する御仁が『虚』を信じ、会津に古くから伝わる「埋葬の屈辱の歴史認識」を撤回したのは情けない限りである（文献⑱）。

なお、『虚と実』の著者は『入用帳』を発見し活字化したことで、会津藩埋葬の実態解明に資する情報を

提供したこと及び筆者の本稿起稿の切っ掛けになった

ことについては評価したい。

を築く」ために重要である。

筆者は平和実現の鍵は「利己」ではなく「利他」の心であると信じている。

歴史研究は過去の歴史を学び、将来に生かすことに意義がある。特に、戦争に関する歴史は「平和な社会

残念ながら戦争は続いている。トランプ、プーチン、習近平の共通点は「利己」である。

参考文献

- 文献①『辰のまぼろし』柴五三郎 私家本 発行年不詳（推定明治30年頃）会津図書館保有
- 文献②「国事受難戦没者、特に反政府軍戦死者の慰霊実態（調査報告）」森岡清美・今井昭彦 昭和56年12月 成城大学文学研究科
- 文献③『会津戊辰戦死者埋葬の虚と実』野口信一 平成29年10月11日 歴史春秋社
- 文献④『京都守護職始末2』山川浩 遠山茂樹校注 1966年2月10日 平凡社
- 文献⑤『ある明治人の記録 会津人柴五郎の遺書』石光真人 昭和46年 中央公論社
- 文献⑥「白虎隊」石田明夫・飯沼一元 2019年10月25日 『会津人群像第39号』歴史春秋社 P 18
- 文献⑦「白虎隊士飯沼貞吉の回生第2版」飯沼一元 2013年3月15日 ブイッソーリユーション
- 文献⑧ 会津への夢街道／幕末の軍制／会津藩 WEB掲載資料
- 文献⑨「飯沼貞吉の生涯」飯沼一元 2010年3月2日 『会津人群像第16号』歴史春秋社 P 71
- 文献⑩「会津少年白虎隊士の殉難とその埋葬」今井昭彦 2000年8月15日 成城大学リポジトリ
- 文献⑪「町野主水」前田 宣裕 『幕末・会津藩士銘々伝（上）』2004年7月20日 小松山六郎、間島勲 編 新人物往来社
- 文献⑫「伴百悦」前田 宣裕 『幕末・会津藩士銘々伝（下）』2004年7月20日 小松山六郎、間島勲 編 新人物往来社
- 文献⑬「戊辰會津戦争回想談 其二」河原勝治 昭和3年 『会津会雑誌32号』
- 文献⑭『会津戊辰戦史』会津戊辰戦史編纂会 飯沼関弥 昭和8年8月1日 P 665～666
- 文献⑮『会津戊辰戦争』平石弁蔵増補版 昭和2年12月5日 P 473 丸八商店出版部
- 文献⑯「白虎隊士飯沼貞吉長州滞在説の物証発見と諸説の解明」飯沼一元 2025年8月 『会津人群像第50号』歴史春秋社
- 文献⑰「奥州白河で習い覚えた盆踊り 白河踊り」中原正男 2025年8月 『会津人群像第50号』歴史春秋社
- 文献⑱『白河踊』中原正男 2017年12月1日 P 33 西日本新聞印刷
- 文献⑲『会津人と長州人かく語りき』早川廣中 2018年8月30日 P 16 (株)ラピュータ
- 文献⑳『梁田家文書第二集 公用簿籍』福島県立博物館友の会古文書愛好会 平成31年2月28日 北斗印刷